

ぼくらは愛を探してる

石 井 杏 紗 美

昔から、身体を丸めて湯船に沈むのが好きだった。

頭から足の先まで見えない力に包まれて、熱い液体が耳の奥を濡らす。心音だけが鮮明に響く、閉じられた世界。このまま、溶けてしまえばいいのに。いくら願っても、できあがってしまった細胞がもとに戻ることはなかった。

たとえば今、死んだとしよう。身体は消えることなく湯の中を漂い続ける。夏の盛りだ。腐る前に見つかるとはまずないだろう。長い間放っておかれ、崩れた肉片は墓に入らず、土に還らず、いずれコンビニ弁当のトレイと一緒に捨てられる。まるではじめから愛着などなかったみたいに。

ぼくの母親は、そういう人だった。

湯船からゆっくりと顔をだす。喘ぐように息をして風呂場をでた。まだ日暮れには早く、部屋の壁が西日を吸い込んで光っていた。ぼくの他に影はない。大学に進学してからずっとひとり暮らした。

鳥のさえずりに紛れて、親子連れの声が窓の下を通りすぎていく。弾んだ言葉は湿った鼓膜に染みて気持ちが悪い。ふやけた指で窓を閉め、クーラーのスイッチを入れた。

カタリ。

回転するモーター音に交じって、玄関からなかが落ちる音が聞こえた。どうせダイレクトメールだろうと、したた

る髪のしずくを拭きながら回収していく。

拾い上げた一枚のハガキには、懐かしい名前と結婚の文字。成人式を終えて数年、この手の招待状は別に珍しくもない。ぼくが気になったのは、主役よりも披露宴に参加するだろう友人のことだった。いや、友人とはいえないかもしれない。小学校を卒業して以来、一切連絡をよこさなかったやつだ。母親の転勤で引越すことになったぼくを、わざわざ見送りにきてくれたのに。またなと言ってくれたのに。薄情者め。思いだすだけで腹が立つ。それでも、かけられた言葉や寄り添った体温が、今でも心の支えになっているのは事実だった。

三日ほど悩んだ末、ぼくはインクの切れかけたボールペンで出席の欄に丸をつけた。

「ひゅー。いっちゃん、きまつちよるう」

「そりゃ、ドーも」

披露宴当日、やはり会場には和孝の姿があった。こちらの想いも知らずに軽い調子で話しかけてくる。奇妙なイントネーションは相変わらずだ。

「蒼ちゃんも結婚かあ。おれら完全に出遅れたなあ」

「別に。こういうのは個人差があるだろ」

素っ気なく返すと、首に腕をまわされ強引に肩を寄せられた。馴れ馴れしいのも変わっていない。

「あー、いっちゃんのそのクールさ。懐かしいのう」

擦り寄る頬は、微かに太陽の匂いがした。ざわめきの中、アナウンスが響く。

「ほら、離れるよ。はじまるだろ」

和孝の身体を押し戻し、乱れた襟を整えてやる。太くなった首と出っ張った喉仏が、なんだかおかしい。仕上げと言わんばかりに押した胸板は思ったより硬くて、目の前にいるのが少年ではなく一人前の男であることを知った。ぼくをつむじを眺めていた目が、礼のかわりに笑みを返す。

「蒼ちゃんの嫁はべっぴんさんらしいから、よう見とかんとな」

流れだす曲。盛り上がる人々。花嫁のドレスも蒼一のスーツも胡散臭いほど白かった。天井のライトが反射して、眩しさに目を逸らす。すぐ隣では和孝が口もとを綻ばせて、幸せそうな二人に釘づけになっていた。

小学校のころから変わらず、ぼくらは別々の方向を向いている。

「ドメスティックヴァイオレンスじゃ!」

わざとらしい発音は一瞬にして教室にいた全員を黙らせた。背に、頬に突き刺さる視線が痛い。ぼくは今まさにスポットライトをあてられている張本人、和孝の襟をつかんだ。日に焼けた耳に口を寄せ、小さく怒鳴る。

「ばか! 声がでかいよ」

一度、声を低めてから、

「なんで児童虐待だと思っんだ?」

ぼくが尋ねると、和孝は窓際の席へ視線を移した。

クラスメイトの遠藤蒼一が人より頭ひとつ分高い背を折り曲げて、厚い本を読んでいる。頬、腕、指先、貼られている絆創膏は全部で五枚。机の下に窮屈そうにしまわれた丸い膝を大きなガーゼが包んでいた。ここ最近、蒼一の身体には目に見えて傷が増えた。小さい擦り傷なら気にもとまらないのだが、さすがにガーゼや包帯となれば嫌でも目につく。この前は確か左肘に包帯を巻いていた。

「やっぱり離婚が原因じゃないのか?」

「……離婚、なあ」

声は、酷く沈んだ。

二年の一学期、蒼一の母親はよその男と家をでていった。父親に預けられた蒼一は苗字こそ変わらなかったが、両親の間でいろいろと手続きがあつたのだろう、一週間ほど学校を休んだ。登校するころには、根も葉もない噂がクラス中

を飛び交っていた。当然、蒼一の両親を悪く言うのもでてきた。変化のない学校生活を楽しむために人をからかって遊ぶ。いかにも子どもらしい残酷な仕打ちだった。心無いクラスメイトが机を囲もうとするとき、和孝は決まって蒼一の傍へいき、なんでもないことのように笑ってみせた。またいつものおせっかいだと思ったが、ぼくも和孝の真似をして笑った。黙って俯くだけだった蒼一が顔を上げる。ぎこちない笑みを返されたときは嬉しくて、いつもより多く話をした。

胸にしまった互いの影が言葉を通して交わる。和孝が蒼一を放っておけなかったのは、ひょっとしたらぼくが和孝から離れられない理由と同じなのかもしれない。向かいあったぼくらはどこか似ていて、小動物が寄り添って身を守るように、本能的に集ったようにも見えた。ともにいることで心を休め、わかりあえる喜びを感じる。

氷のように固まっていた蒼一の表情は日に日に溶けていった。

「あとはお前次第じゃ」

和孝の言葉に蒼一は力強く頷いた。窓から差す光がすっかり柔らかくなった頬を照らした。穏やかな顔はまるで鯉音様のようだった。

これから先、両親のことではなを言われようと、蒼一は笑って乗り越えるに違いない。ぼくは確信すると同時に、和孝のことを思った。和孝の家に両親はいない。小さな平屋に祖父と二人だけで住んでいる。三歳のときに事故で他界してしまったと笑って話していたが、かつては和孝も蒼一のように俯いていたことがあったのかもしれない。そのとき、和孝の隣には、ちゃんと笑ってくれる人がいたのだろうか。理想を語る笑顔の裏になにがあるのか、なにがあったのか。和孝の過去に、ぼくはどうしようもなく惹かれていた。

「やっぱ確認せんとあかんな」

和孝が囁く。

「尾行じゃー!」

意気込んだ声は、熱い吐息とともにぼくの鼓膜を震わせた。

学校が終わると、ぼくらはランドセルを背負い駆け足で教室をでた。廊下の影で蒼一がでてくるのを待つ。

「あー」

突然、和孝が短い声を上げ、振り返る。

「いっちゃん、カバーせんと。おれらのはちいと目立つ」

ランドセルの中から慌てて取り出したのは、一年生のときにつけていた黄色のナイロンカバー。表面に書かれた交通安全の文字は見事にしわくちゃだった。ぼくは和孝のカバーを取り上げ、二、三度横に伸ばしてやってから、自分の分を取りだした。必要最低限の折り目しかついていないそれを、ランドセルにつける。

(中略)

ぼくは二つのランドセルを交互に眺める。カバーの隙間から覗く、鮮やかな紫色とオレンジ色。

これが、カバーを捨てられない理由であり、ぼくらの出会いのきっかけだった。

最近のランドセルは多種多様だ。店頭には地味な色から派手な色まで、まるで色鉛筆のようにそろっている。しかし、いくらランドセル業界が腕をふるったところで、長年培われてきた伝統はそう易々と崩れはしない。特に田舎となれば尚更だ。引越してきたばかりで、不安と期待が心を揺らす入学式の日。ぼくは世間の流れというものを改めて実感していた。

教室の後ろ、区分けされた棚の中を赤と黒が並んでいく。限られた二色の間に、どうして他の色が割り込めるだろう。

紫色に光る新品のランドセルを抱きしめる。隠しきれない色は、早速クラスメイトの目をひいた。

「うっわーなんだこの色！　へんなの！」

「知ってたか？　紫が好きなやつってエロいんだってよー」

あつという間にぼくを取り囲む、下品な笑い声。ぼくは恥ずかしいやら腹立たしいやらで、机に視線を落としたまま黙っていた。からかう言葉は容赦なく、今まで好きだった色を醜い色へと変えていく。

「なんじゃあ？　もりあがつとるのう」

目頭がじんと熱くなりかけたとき、ふと、気の抜けた声が耳に届いた。

「エロいとかエロくないとか、紫にはそんな意味もあるんか。知らなかったのう」

群れるクラスメイトをかき分け、ぼくの前に立つ、知らない顔。少なくとも入学式の会場では見かけなかったやつだ。

「なんだお前」

「ん？　なにつてクラスメイトじゃろ？　池田和孝じゃ。よろしゅう」

「はあ？　式にいなかったじゃねえか」

「寝坊じゃ寝坊！　昨日わくわくして眠れんかってん。しゃあないじゃろ」

飛んでくる野次にも和孝は物怖じせず答えていく。聞き慣れない訛りは、どこか時代劇にでてる老人を思わせた。

古めかしい言葉に反して、快活な声が響く。

「それより知っちゅうか？　しょーとくたいしサン」

「は？」

いきなりの質問に、集まっていたクラスメイトは一斉に首をひねった。

「あんひとが考えたカンイジューニカイっちゅうのは、偉い人が紫を着るんじゃぞ」

滞りなく話す口を誰もとめられない。自信満々に発せられる単語には妙な説得力があった。騒いでいたクラスメイト達がひとり、またひとりと耳を傾けはじめる。まるで、歴史の授業を受けているみたいだった。

ひよつとしてこいつは、ぼくを守ろうとしているのか。ぼくは漸く和孝の意図が読めた気がした。味方の登場はたとえ初対面だとしても心強い。

和孝が腰に手をあて、誇らしく言い放つ。

「それにな、男は皆オオカミじゃ！」

流れていた空気がとまる。ぼくを含め、皆、あぐりと開けた口を閉じることができなかった。

「エロいのはあたりまえじゃろ？」

ぼくは思わず吹きだして、腹を抱えて笑った。取り囲んでいたやつらは、しばらくの間固まったあと、ばからしいといった様子で各々自分の席へと戻っていった。去り際に全員が和孝の背を見て目を丸くした。奇妙な言葉に気を取られて気がつかなかったが、和孝のランドセルは、夕日のようなオレンジ色をしていたのだ。

「きれいじゃろ？」

ぼくが頷くと和孝は嬉しそうに肩を揺らして笑った。

「でもなあ。ほんとにあの親父さんがそんなことするじゃろか？ 親が子どもに暴力をふるうなんて、やっぱ考えとわない」

和孝は家族というものに対する思い入れが強い。幼いころに両親が死んだせいもあるのだろう。家族とは、あたたかくて優しく、いかにも日曜日の夜にやるホームドラマにでてくるようなものだと思えている。甘ったるい理想は、尊重したいと思うと同時に、時折ぼくを苛立たせた。

「なに言ってるんだ。自分で言いだしたんだろ？ それにな、親だからって皆が皆、子どもを愛してるわけじゃない」

「そんな……」

わかっている、と和孝は言うだろう。

近年テレビや新聞には、虐待をはじめとした家族絡みの事件があとを絶たない。ぼくらは世間の闇を知らずに生きて

いけるほど、箱入りの坊ちゃんではなかったし、むしろそういった闇を早い段階で耳に入れ、知識だけを肥大させるような子どもだった。

それでも、と和孝は口を開く。あとに続く言葉が綿あめのように甘いだろうことは、聞かずともわかっていた。

「往生際が悪いな。世の中にはそういう家庭だってあるんだ」

ぼくは容赦なく吐き捨てる、わざと唇の端を吊り上げて笑った。

「蒼一の家が児童虐待をしてるってんなら、ぼくの家はさしずめネグレクトってどこか」

自分で言っただけでこんなにも心を抉られるとは思ってもしなかった。和孝は悲しいような苦しいような顔をして、なにも言わないまま、口をへの字に曲げた。ぼくは自分を残酷な人間だと思った。

和孝が家族というものに夢や希望をもっているなら、そのまま放っておいてやるのが、よい友達として、あるべき姿に違いない。むきになって言い返したのは、たとえ嘘でも認めたくなかったからだ。単身赴任と称して家に帰ってこない父親と、ぼくが起きる前にでかけ、眠ったあとに帰る、仕事づけの母親。和孝の思い描く家族とはかけ離れた、名ばかりの家族。ともに暮らした記憶があまりないため、父親のことは特に気にならなかったが、母親の場合はそうはいかなかった。たまに顔をあわせるだけで、なにかしら期待してしまう。ぼくを見もしない瞳に、不満ばかりが募っていた。『……でも、いつちゃん。いつちゃんは学校にもいかしてもらえとるし、食事も用意してあるってゆうとったじゃろ?』「そうだな。ちゃんと最低限のことはしてもらってる。ありがたいことだよ」

「でもな、食事だけで世話っていえるのか? 今時ベットでもそうはいかない」

確かアメリカでは十一歳以下の子どもに留守番をさせること自体、違法だったはずだ。ぼくはいつか見た夕方のニュースを思いだす。アナウンサーはこうも言っていた。ネグレクトは無視をするという意味で、親が子どもに対して無関心であることを言うのだと。

ぼくの母親は、まさしくそれだった。

半ズボンの裾を握りしめる。生地に皺がつくのは嫌だったが、行き場のない感情をどうすることもできなかった。

「……いっちゃん、寂しいのんか？」

「ばか！ そんなわけあるか！」

ぼくは大声で言ってから、慌てて口を覆った。道の先では蒼一の黒いランドセルがなにも知らずに揺れている。

「そういうんじゃない。でも、こんなんじゃない、愛されてる実感がわかない」

「いっちゃんはまた、ませたことを言う」

和孝は困ったように笑った。

「うるさい。子どもだって人間なんだ。愛だの恋だの語るときだつてある」

本当は和孝に言うより、世間一般の大人達に言つてやりたかった。

「愛されたいと思つてなにが悪い！」

嘘のない主張は、心を少しだけ軽くした。和孝はばかにすることなく、ただぼくを見つめていた。得ることのできない母親の視線を、かわりに与えてくれるような気がして、胸が熱くなる。

突然、和孝が目を見開いてぼくの手をつかんだ。走りだした背中に向こうに、蒼一の姿が見える。いつの間に、あんなに離れてしまったのだろう。黒いランドセルは角を曲がつて消えた。ぼくらは地面を蹴つて進む。足音は違うリズムを刻むのに、つないだ手は離れない。和孝の力強さは、いつだつてぼくを安心させた。

「そうじゃないあ。……おれも愛されたい」

和孝のはにかんだ声が、風に乗つて耳に届いた。

(中略)

「ちよつと擦り剥いただけなのに、父さんたら大げさでね」

蒼一は困ったように笑つて、頬の絆創膏に手をやった。照れ臭そうに撫でる仕草は、虐待の疑惑を一瞬にして吹き飛

ばす。ぼくはほっとすると同時に、心の隅で残念に思った。両親の離婚を聞いたあの日から、蒼一はぼくと同じなのだと思っていた。母親がでていっても蒼一にはまだ愛してくれる父親がいる。勝手に親近感を抱いて、わかりあえた気になっていた自分が情けない。

「せっかくなこまでできたんだ。二人も一緒にくるかい？」

「あれ、ぼくの母さん」

滑り台の横にあるベンチを指差して、蒼一が言う。あまりに自然な声だったから、ぼくははじめ聞き間違いかと思った。

「母さんって……なんで？　だってお前」

捨てられたのに。喉まででかかった言葉を慌てて呑み込む。蒼一は目を細めて笑った。

「ぼくと父さんはね。母さんのことを、もう怒ってはいないんだ」

下がった眉も、伏せられた瞼も両親の離婚を乗り越えたあのときとなんら変わらない。観音様みたいな穏やかな表情だった。

「それにね、母さんはぼくとの約束を守ってくれた」

優しい視線の先には薄桃のタオルをかけたベビーカーがある。ベンチに座った女性と並んでいることから、二人が親子だということは明らかだった。

「母さんが家にいたころ、ぼくは一度だけ妹がほしいと言ったことがあるんだ」

「じゃあ、あの子は……いや、でも」

あとに続く言葉を言えなくて、口を噤む。蒼一は頷くように目を閉じて、ゆっくりと開いた。

「そうだね。でも、母さんの血をひいているかぎり、ぼくの妹に変わりはないよ」

静かな声に、眼差しに、強い意思を感じる。

「……会わないのか？」

「会わないよ。これからずっと」

影の落ちた横顔は酷く寂しそうに見えた。

(中略)

会いたいのなら、会いにいつてほしかった。想いを示してほしかった。蒼一のアはきつと伝わらない。優しい眼差しも。悲しい決意も。

同情する一方で、絶対に認めるものかと思う。蒼一のア方ア認めることは、ぼくのア母親のアを認めることにもなるからだ。

もし、本当は愛していたのよと言われても、信じるアができない。あなたが気づいていないだけで、本当はずっと見ていたのよ。愛していたのよ。なんて、偽りの言葉にほだされるほど、ぼくはもう純粹ではなかつた。アの冷ややかな目の奥に幾度もアを探して、失敗するたび、歪んでいつてしまったんだろう。

アは相手の求める形で与えるからこそアになる。与えられたものがアされていアと感じてはじめて関係が成立するのだ。密やかな愛情など意味がない。

見えないアなんて、少なくともぼくは知らない。

「ぼくはもう、充分なんだよ」

海の底で小さな貝が泡を吐くような、微かで芯のある声が聞こえた。蒼一のア悲しくてあたたかな想いが、ぼくのア身体を優しく引き裂いていくのがわかる。人が大きく広がる海を見たとき、自分をちっぽけな存在だと感じるように、自身がどうしようもなくだめなやつに思えた。自分を捨てた母親を許す蒼一と、両親を亡くしても強く生きている和孝と、ぼくのアまわりには深い海が多すぎる。今にも溺れてしまいうで、足が震えた。

「ほれ！ いっちゃん！」

突然、ひやりとしたものを頬に押しつけられる。

「なに？ ラムネ……、いつの間に」

細い堀の上に器用にしゃがみ込んで、瓶の口に嵌ったビー玉を落とす。プシツという弾けた音が耳に心地よい。和孝は溢れる泡を素早く口で覆い、喉を鳴らして飲み込んだ。蒼一も真似をして一気におおる。二人とも、見事なまでに滴ひとつこぼさなかった。ぼくも負けじとあとに続く。が、やはり上手くはいかなかった。唇の端から漏れた泡が首を伝い、手や膝を濡らしていく。足もとには、まだらの染みがいくつもできた。

「いっちゃんは不器用じゃのう」

和孝は大げさに笑いポケットに手をつ込んだ。ハンカチを探しているようだが見つからないらしい。ぼくは苦笑して自分のポケットからハンカチを取り出す。

「平気」

言いながら、丁寧に口を拭った。

「そろそろいいんじゃないか」

もときた道に戻り、堀をおりと、ぼくと和孝はランドセルのカバーを外した。もう隠れる必要はなかったし、なによりぼくは夕暮れどきに和孝のランドセルを見るのが好きだった。

「こういうの、もうやめようと思うんだ」

蒼一がぼつりと呟く。

「じゃあ、また明日」

鍵を開け、家の中へ入っていく黒いランドセルを見送る。首筋に残ったラムネのべたつきは、いつになっても消えなかった。

(中略)

「おい、いつちゃん。今、おれのこと哀れんじやろ」

突然、前を歩いていた背中が振り返る。向けられた眼差しは見たこともないほど鋭く、ぼくは金縛りにあつたように動けなくなつてしまった。

「なに考えとんのか知らんけど、変に遠慮して黙つとるんなら承知せんぞ」

落ちついた声はいつもより低い。胸のうちを見透かされ赤面した顔が、全身を突き刺す怒りに青ざめていく。黙つていようと決意した唇は、早くもわなわなと震えだした。

「だって、言えるわけないだろ！」

長い影の落ちた車道に向かつて喚く。

「和孝も蒼一も、母さんがいなくてもちゃんとしてる。なのに、ぼくは」

求めることをやめられない。与えられたものに満足できない。

「いつちゃん、よく聞けよ。おれも蒼ちゃんも母さんがいないからって可哀想なんかじゃない」

和孝の手がぼくの両肩をつかむ。強い力は、骨まで届いた。

「そりゃあ、いなくて寂しいこともある。けどな、いるからこそ寂しいことだつてあるんじゃない。いつちゃんが悩むのはあたりまえのことなんよ」

ぼくは頷くこともできずただ俯いていた。なにを言われたところで上手く受け入れることができない。頑なな自分が酷く子どもじみているように感じてならなかった。握りしめた手を和孝が強引に取り上げる。

「こい！ 今日はずうちに泊まつていけ」

引きずられるようにして進んでいく。夕日が和孝のランドセルを一層鮮やかに染め上げていた。あたたかな色が目に

沁みて、ぼくは何度も鼻をすすった。

「じーちゃん、ただいまー」

年季の入った木製の廊下に、声が響く。奥からでてきた和孝の祖父はぼくを見るなり、目を細めて笑った。

「ようきたなあ、いっちゃん。おかえり」

「……邪魔します」

軽く礼をして玄関に上がる。おかえりと言われたのは久しぶりで、隣にいる和孝にあてた言葉だとわかっていても胸がドキドキした。

「今日、いっちゃんうちに泊めるから」

前をいく背中がきつぱりと言う。急な訪問にもかかわらず、和孝の祖父は快く受け入れてくれた。

「いただきます」

三人でちゃぶ台を囲み、夕飯を食べる。だされた料理はほとんどが茶色だったが、わざとらしい色合いのコンビ二弁当とは比べものにならないほど、おいしかった。食べものを口に運んで、ふと見上げると目があつて、他愛もない話をして笑う。くすぐったいような、泣きたくなるような変な気分だった。

窓の外を闇がすっかり覆うころ、促されるまま一番風呂をもらった。慣れない手拭いで身体を洗い、湯船につかる。

湧いたばかりの湯は思ったより熱くて、昼間擦れた肌がビリビリと痛んだ。タオルや着替えの準備をしていたのだから、遅れてやってきた和孝が頭を洗いはじめる。ぼくは広がる波紋を指先で追いながら、ぼそりと呟いた。

「なあ、和孝。やつぱりぼくは、母さんに……」

嫌われてるんじゃないか。

「心配せんでもいっちゃんは愛されとるよ」

真剣な顔で言つて、すかさず、にひひと笑う。ぼくは返す表情を見つけられずにもう一度頭を沈めた。二人分の鼓動が水面を揺らす。このまま溶けてしまえたら、どんなに幸せだろう。少なくともっていく酸素が憎らしかった。

風呂から上がると、廊下に置かれた電話の前へ連れていかれた。

重いボタンを押して呼び出し音を数える。留守番電話のアナウンスは湿った鼓膜を惨めにさせた。

「……母さん、今日和孝の家に泊まるから」

用件だけ言つて切ろうとした受話器を和孝が奪う。

「おぼちゃん？ 和孝だけど。いつちゃん明日の朝ハンバーグが食べたいって！」

「な、なに言つてんの？ ちよつ、返せ」

ぼくは慌てて奪い返し、声を張り上げた。

「今のはっ」

タイムリミットの電子音が言葉を遮る。メッセージは、訂正されないまま記録されてしまった。

「なにしてんだよ！」

怒りにまかせて、和孝の胸倉をつかむ。

「悩むぐらいなら、はつきりしといたほうがいい」

まっすぐに見つめてくる瞳に圧倒され、逃げるように目を逸らした。

「だからつてお前。これでほんとに用意されてなかったら」

愛されてないことを証明するようなものじゃないか。

「そんなときは、おれんちにこい！」

力なく落ちたぼくの手を握りしめ、和孝は自信満々に言った。

「うちの子になればいい」

伝わる温度が、目頭を熱くする。本気だとわかっているからこそ、震えそうになる声を隠して笑った。

「お前、ばかだろ」

なれるもんなら、とっくになってるよ。

与えられた優しさに水を差したくなくて、本音は腹の底へしまい込んだ。

和孝の祖父は、子どもは子ども同士話すこともあるだろうと空いている部屋に和孝の分とぼくの分の布団を敷いてくれた。

「なんでそんなふうに見えるんだ」

押し入れの匂いがある枕を抱きながら尋ねる。

「親が子どもを愛してるって。ぼくは、どうしても思えない」

母親の冷ややかな目の奥に、愛情を見出せたことなんて一度もないから。

仰向けに寝た和孝は、少しの間黙って天井を見つめていた。

「おれはじいちゃんが好きじゃ。でもやっぱりお父さんとかお母さんがおらんくて寂しいって思うこともある」

発せられた声は、とても密やかなものだった。

「信じるしかないんよ。もう、受け取れんから」

首をこちらに向けて、口もとに人差し指を立てる。

「内緒な」

ぼくは静かに頷いた。

多分、和孝は自分の寂しさが祖父を傷つけると思っている。普段明るくふるまっているのもそのせいだろう。まわりを気遣いながら、両親の死を抱えて生きているんだ。ずっと、ひとりで。

「あ！ いいこと考えた」

勢いよく回転した身体がぶつかる。弾んだ声は途端に、悲しく聞こえた。

ぼくらは愛を探してる

「明日ハンバーグだつたらおれの勝ち。今日のビー玉ちょうだい」

指した先には紫色とオレンジ色のランドセルが並んでいる。中にはそれぞれ昼に飲んだラムネのビー玉が入っていた。ミニカーやゲームほど魅力はないはずなのに、ぼく達の学年はなぜか光るものを集めてしまう傾向があった。

「自信满满だな」

早くも勝った気である和孝に、ぼくは呆れた目を向ける。

「言つたじゃろ。おれはただ、信じたいただけ」

二カッとした口から白い歯が覗いた。

和孝はきつとぼくを通して親の愛を探しているのだろう。ぼくが愛されることで、和孝は世間でいう親の愛に確信を持ちたいのかもしれない。それが和孝自身、愛されていたことを証明することにもつながるから。

ぼくらは互いにひとつの布団を持っていたけれど、いつの間にか同じ布団の中で肩を並べて眠っていた。

翌朝、和孝に見送られ家路についた。学校まではまだ時間がある。今日必要になる教科書を頭の中で確認しながらアパートへ戻った。

扉の鍵を開け、玄関へ入る。母親の靴はやはりなかった。期待していないとはいっても気にならないわけではない。高鳴る胸を押さえてそろそろトリピングを覗く。テーブルの上はきれいなまま。冷蔵庫の中にはいつものようにコンビニ弁当が入っていた。ゴマのかかったご飯の脇にはハンバーグが添えられている。瞬間的に晴れ渡った心の隅で、ああ、やっぱりなと思った。慣れた手つきで電子レンジに入れる。

母親が突然の要求に応えてくれたのは嬉しかったが、どうしてもわかば公園や紫色のランドセルが頭を離れなかった。もしこれが手作りだったなら、素直に喜べたのだろうか。ありもしない可能性を考えるのは虚しくなるだけだった。

間抜けなベルが静まり返った部屋に響く。即席のぬくもりに、濡れた頬をあてた。同じようなことを、今まで何度繰り返しただろう。生まれたときに感じた母親の体温をぼくはもう覚えていない。

「母さん」

縄るように呼んでも、返ってくるのは電線にとまった鳥の声だけだった。

今日の愛は四百二十円。ぼくは残さず食べ終わると、空いたトレイをゴミ箱に捨てた。

「おっはよう」

教室に入ってきた和孝は真つ先にぼくの机にやってきた。気になっているくせに結果を聞いてこないのは、和孝なり
の思いやりなのかもしれない。

「まあ、約束だからな」

ぼくは拳を差しだす。開いた手の上で、透き通ったビー玉が淡い影を落として揺れた。

「よっしゃー！」

全身を使ったガッツポーズと純粋な笑顔は朝の太陽よりも眩しい。

「よかったな。いっちゃん」

和孝はほくほくとした顔で、ビー玉をポケットにしまった。ぼくは眉間に皺を寄せてわざとらしく唇を失わせる。

「なにもよくない。朝から胃がもたれたぞ」

よくないのは、母親がどうしたところで、満足できない自分自身を知ってしまったから。胃がもたれたのは、なにも
ハンバーグだからではなく、コンビ二弁当特有の大量に入った添加物のせいだ。

「もー、わがままやなあ」

言葉の真意を知らずに和孝は無邪気に笑う。ぼくも真似をして笑ってみせた。

どうせ満足できないのなら、和孝の中でだけでも、幸せなぼくでいよう。母親がぼくをどう思っているかを考えるよ
り、愛されている自分を作り上げる方がはるかに楽に思えた。

ぼくが演じることで、少なくとも和孝は親の愛を信じることができる。生まれてきたことに、両親との淡い思い出に

自信を持つことができる。

和孝が満足するなら、それでよかった。

二次会に流れる人々の波から逸れ、ひとり歩く。華やかなライトのせいで、目の裏がまだチカチカしていた。耳に残るざわめきが消えない。誰のものかも知れない香水の匂いを早く洗い流したかった。

「おーい。いっちゃん」

後ろから和孝が駆けてくる。明日も仕事があるからと、二次会を断ってきたらしい。蒼一のこと、久しぶりにあった同級生のこと。よく喋る口に、ぼくは曖昧な相槌を打った。

「ついでる」

和孝の肩についた花卉を払う。執拗に纏わりつく幸せの余韻が忌々しかった。駅に続く道はやけに長く、曲がり角を曲がるたび、右手を塞ぐ引き出物袋を投げだしたい衝動に駆られた。

ふと、道の端に小ぢんまりとした銭湯を見つける。身体を包む湯の感触と耳障りな音のない世界がどうしようもなく恋しい。

「なに、銭湯？」

ぼくの視線に気づいたのか、和孝が尋ねた。

「ああ、無性に入りたくなって。妙な時間帯だし。和孝は先に帰っていいよ」

腕時計は午後四時をまわったところだ。傾いた日差しとなまあたなかい風が、首筋に汗を垂らす。今入っても、帰り道でまた汗をかくことはわかりきっていた。

「おれも入ろうって」

和孝はしばしばくの顔を見つめると明るい声で言った。なにかおせっかいなことでも考えたのだろう。背中を押す手はやけに優しい。

番台に挨拶をして奥へ進む。開いたばかりの店の中には、客はひとりもいなかった。貸し切りだとはしゃぐ和孝は子どもみたいで、思わず苦笑した。

一通り洗って、広い湯船に腰をおろす。熱めの湯は硬くなっていた身体を芯から解していった。二人の他には誰もいないのをいいことに、ずるずると頭まで沈んでいく。塞がった耳に響くのは、自分の心臓の音だけ。華やかな音楽も、純白のスーツも遠い世界に追いやった。淀んでいた胸が空っぽになるまで、長い時間を要した。

「いっちゃん、ほんとそれ好きナ」

酸素を求め、顔を上げると、和孝がいつの間にか隣に座っていた。ぼくはしたたる滴を手のひらで拭いながら尋ねる。「そういや、お前今までどうしてたんだ」

「どうって？ 普通に大学いっとった」

あまりにも平凡な答えに、ムツとする。

「普通になってなんだよ。だったら、手紙のひとつくらい……」

「ああ、だっていっちゃんは寂しがり屋じゃろ？」

和孝は照れ臭そうに笑った。

「手紙なんて書いたら、きつとおればつかになる。おれのせいで新しいところに馴染めなくなったら嫌じゃ」

「なんだそれ。自意識過剰だな」

確かに和孝から手紙をもらっていれば、ぼくは安心して人と関わること自体やめていたかもしれない。もともと関係を築くのは苦手だったし、わかりあおうと努めることも嫌いだ。どうせ話したところで、理解しあえるはずがない。血がつながっている母親とさえ上手くいかなかったんだ。他人だったら尚更だろう。

ぼくにとっては、和孝だけが例外だったんだ。

「いっちゃんこそ、どうなん？ 困ったこととかないか？」

自分なりの考えがあつたにせよ、放っておいたことに責任を感じているのだろう。心配そうに聞いてくる和孝は、本

当の親よりも親らしい顔をしていた。

「おかげさまで。そこそこうまくやつてるよ」

そう、うまくやつてる。

和孝と離れてからのぼくはあたりさわりのない言葉だけを使つて生きた。距離を詰めない関係は楽だ。おかげで心から友人と呼べる人はひとりもできなかったが、特に構いはしなかった。ぼくなり頑張つたつもりだし、表面上だけでも関わるうとしたことをむしろ褒めてもらいたい。

「そっか。よかった」

昔と変わらず、和孝はぼくの言葉の真意を知らぬまま、ほつと胸を撫でおろす。密かに芽生えた罪悪感は、上がり湯で流した。

腰にタオルを巻いた和孝が番台へ駆ける。冷えたケースの中を覗き込み、まるで記念写真でもとるかのようにピースサインをした。

「おばちゃんラムネ二本ちょうだい」

戻ってくるなり、ぼくに差しだして、慌てて引込める。

「ちよいと待って。今開けてやる」

「いいよ。子どもじゃないんだから」

「ええから。またこぼしたら洗い直しじゃ」

和孝は隅に置かれていた簡素な藤椅子に瓶を置くと、飲み口にピンを押しあてた。嵌っていたビー玉が落ちる。プシツという小気味よい音を立てて瓶の中が騒ぎだした。手のひらで力強く押さえているので、吹き上がった泡は出口を見つけれずに液体へと戻っていく。滴はひとつたりともこぼれなかった。

「すこいじゃろ？ 大学の友達に教えてもろてん。お前の飲み方はアクティブじゃ言われてな」

改めて離れていた時間を思い知らされる。和孝はぼくと違って本当にうまくやつているらしい。得意げな顔が少しだ

け気に入らなかつた。

ぼくはべたついた唇を舐めながらまだ熱気を放つ肌に服を纏っていく。気取った服におしゃれな紙袋。追いやつたはずの純白が頭をよぎつた。舌に纏わりついた甘つたるさを前歯の裏で拭う。

「離婚すればいいのに」

口からこぼれた言葉に、自分でも驚いた。恐る恐る和孝を窺う。悪いことをした子どものように身体が強張っていた。「つてえ！」

熱い手に叩かれた背がじんじんと痛む。

「そつ、僻まんと。おれ達はこれからじゃろ」

「そ、そうだな」

励ます言葉に頷きながら、ひっそりと安心した。他の誰にどう思われようと構わないが、和孝に軽蔑されるのだけは避けたかった。

「よし。いつちゃんにはこれをあげよう」

大きな拳から落ちたのは艶めくビー玉。前に和孝にあげた思いやりが返ってきた気がした。

ぼくは数少ない電話帳に和孝の名前を登録しながら、和孝の言うこれからがこないことを祈つた。人一倍家族に憧れているやつだ。いつか大事な人を見つけて、本当に離れていってしまうことが怖い。手の中を覗くと、歪んだ自分が同じようにこちらを覗いていた。

「ただいま」

ひとり暮らしの家に返事をするものはいない。ぼくは棚の上に和孝からもらったビー玉を置いた。

「ぼくが本当にほしかったのはこれだよ」

蛍光灯を反射して眩く光るそれを、指で転がしながら呟く。

「ランドセルでもハンバークでもない。たったこれだけ」

ちっぽけな球体の中には、確かなぬくもりがあった。

(中略)

「母さんにはきつとわからないだろうね」

安っぽい写真立ての中にいる母親の目は相変わらず冷やかで、少しもぼくを見ようとしなかった。コップに入った水が波紋を立てる。ぼくは賞味期限の切れたまんじゅうをゴミ箱に捨てて、かわりに引き出物でもらった菓子置いた。

「いっちゃーん！」

保育園の玄関を覗くと元気な声が飛んできた。

「おお、今日も元気だなあ」

両手を広げて駆け寄ってきた少年を抱き上げる。焼けた肌は父親と同じ太陽の匂いがした。

「こら、和明。お父さんはこっちじゃろ」

駐車場に車をとめてきたのだろう、和孝が小走りで行ってくる。呆れたように吐いた息は少し苦しそうだ。ぼくは苦笑して、まくり上げた腕に和明を渡す。

(中略)

三十路に足を突っ込んだころ、和孝から結婚すると知らされた。相手は長い黒髪をもつ大人しそうな女で、前に仏壇で見た和孝の母親と少し似ていた。

和孝とは何度か飲む機会があったが、やはり以前よりも距離を感じずにはいられなかった。男も女も家庭を持てば変わる。グラスに浮いた滴を紙ナプキンで拭きながら、ぼくはいつも先に帰っていく背中を見送らなければならなかった。追加の酒はいくら飲んでも味がしない。怠さに微睡んでいると隣には決まった女が座るようになった。変わりばえのしない毎日。いきつけの居酒屋。そのうち、ぼくにも妻ができた。

「パパ」

和孝のでていった門を眺めていると、ズボンをつんと引かれた。ぼくは不安そうに見上げてくる娘を抱き上げる。

「おまたせ。美優」

「ほんとうよ。かずったら美優より先にいくんだもん。信じられない」

毎度のことながら、ぼくに懐いている和明のことが気に入らないらしい。頬を膨らませて、スーツのネクタイを握りしめる。

「パパは美優のものでしょ」

ぼくは小さな頭を撫でて、頷いた。

「今日はね、折り紙をしたの。かずはぶきよーだからチュウリップも折れないのよ。仕方ないから美優が教えてあげたの。それからね、おっきい画用紙にパパとママの絵を……」

帰り道、意気揚々と話していた美優が口を噤む。ふいに訪れた沈黙は、夜の闇に乾いた靴音を響かせた。

母親はいつだって子どもに影を落とす。もちろん世界中の母親がそうだというわけではない。あくまでぼくの知っている母親の話だ。

「あなたの愛は薄っぺらいのよ」

去年の冬。結婚生活を終える最後の晩に、妻は諦めたように嘯いてぼくの耳を食んだ。ひとつのベッドに横になるぼくと妻の間には、いつだって見えないしきりがあるみたいだった。朝がきて、いつもは勝手にとまってくれる目覚まし時計をとめる。冷たくなったシーツの上には、やけにピンとした離婚届と一本の長い髪の毛が落ちていた。色違いで買った歯ブラシも、誕生日に買ったチェックのエプロンも置いて、妻は身体ひとつでどこかへ消えてしまったのだ。

(中略)

妻はぼくらほど言葉が必要としなかったし、むしろ無言の愛を望んでいる節があった。ストレートな告白をはじめはあんなに喜んでいたくせに。女というものは本当にわからない。相手の求める形で与えていた愛はいつしか伝わらなくなっていて、異なる術をぼくは持っていなかった。妻はよく、ぼくの目を見てなにかを言いかけては、全てを見透かしたように黙り込んだ。仕事にいく前、おやすみを言うとき、キスをしたあと。何度も見つめあつたけれど、互いのほしいものを得られたのはほんの数回だけだった。

伝わらない愛情など意味がない。ぼくと妻の関係は既に破綻してしまっていた。

また置いていかれることを恐れたのかもしれない。妻がでていつてから、美優は子ども部屋ではなく寝室のベッドで眠るようになった。おやすみと言って、ぼくの目をじっと見つめる。それだけが、母親譲りだった。幼い瞳は妻と違って、ぼくの中にある愛をいつだって探しあてることができた。探しあてた上で問うのだ。ぼくは美優を抱きしめ、髪を撫でながら、毎夜のごとく絵本を読み聞かせるように愛を語った。いつかは美優も妻のように女になる日がくるのかもれない。せめて、そのときまでは互いに支えあって生きていこう。理解しあえる相手といえるのは心地よくて、仕事の疲れも吹き飛ぶほど酷く穏やかな時間だった。

「パパ」

腕に抱いた美優が、お決まりの台詞を言う。

「美優のこと愛してる？」

「美優はまた、ませたことを言う」

ぼくはふと思い立って、以前和孝に言われた台詞を繰り返してみた。柔らかな指に頬をつねられる。

「ちゃかさないで。美優はね、ママがいなくてもパパが愛してくればそれでいいの。だからすっごく大切なことなのよ」

「……そうだね。ごめんね」

ぼくは素直に謝って、とびきり優しい声で囁いた。

「愛してるよ」

美優は頬を離すと、かわりにキスをしてくれた。

「美優もパパを愛してる」

「ありがとう」

寂れた街灯の下を通り抜けて、角を曲がる。通りの向こうに遅くまでやっているスーパ―の看板が見えた。

「さて、美優。ぼくらは今夜なにを食べようか」

ところどころ球の切れた電飾を眺めながら尋ねる。

「うんとねー。……あ！ 美優はハンバーグが食べたいな」

「ハンバーグかあ」

ほろ苦い思い出が胸の底で疼く。四百二十円のラベルも、即席のぬくもりも、まだはつきりと覚えていた。

「じゃあ、ひき肉を買わないとね」

「ひいたお肉？」

ぼくらは愛を探してる

「そう。あとは玉ねぎと、パン粉は家にあったかなあ」

ぼくはあの人とは違うから。できる限りの愛を示そう。見える形で。妻には上手く伝わらなかったけれど、きつと美優ならわかつてくれる。

「せっかくだから。美優の好きなうさぎの形にしようか」

「できるの？ やったあ！ パパ早くいこう」

ばたばたと暴れる足を地面におろす。美優は身体を後ろに傾かせながら、ぼくの手を引いた。

「ここら。前向いて歩かないと危ないよ」

「平気よ。パパが美優を守ってくればいいんだもん」

握りしめる指先は切ないほど熱い。

「絶対に、離したらだめよ」

見上げる瞳が月明かりを吸い込んで光る。まるで、いつかもらったビー玉みたいだった。

(以下略)

※尚、本文中、適宜中略してあります。